

空手道学習者のスポーツ価値志向に関する研究

藤原 弘生*・池川 茂樹**・直原 幹**

(平成28年3月7日受付；平成28年5月2日受理)

要 旨

空手道の伝統的な文化性の継承と学校体育の実技教育における空手道の発展の一助とするため、空手道を継続的に実践している高校・大学生のスポーツ価値志向を質問紙によるアンケート調査の結果から検討した。その結果、(1) 空手道群のスポーツ価値志向では「自己鍛錬志向」が強かったことから、現在の空手道実践者には空手道における伝統的な精神性が継承されていると解することが出来た。しかし、(2) 他種目の場合よりも「勝利志向」を強く意識していた。特に大学生実践者において顕著であった。今後、競技としての空手道実践が主流となった場合は、さらに「勝利」が強く強調される可能性も考えられる。現在の中学校「体育」における武道必修化の中で、即効的な攻撃力が身につく空手道が武道教材として取り扱われた際、このような状況では、いじめ・暴力の道具に成り得る危険性も危惧されよう。一方、授業での空手道の採用により礼、協調性、忍耐力、他者理解力など教育的効果が期待出来るという長所も示唆されている。今後、空手道を教材として取り扱うためには、指導者が技術や勝利のための方法論のみでなく、空手道の「人格形成を目指す運動文化」としての特性的価値を理解し、その精神性を具現する空手技法を学習者に理解させることが学校体育の実技教育における空手道の発展のために必要と考える。

KEY WORDS

Karatedo 空手道, Budo 武道, Value Orientations toward Sport スポーツ価値志向

1 はじめに

空手道は、素手による突き・蹴り等の打撃技を主体とした武道である。歴史的には、沖縄在来の武術であった「手」に中国武術である南派太祖拳が影響を与え発達していった⁵⁾とされている。本土への伝播は、1922（大正11）年、文部省主催の第1回体育展覧会における船越義珍らの演武とともに始まった。その後10余年の間に主に大学の部活動に普及した¹²⁾。船越義珍の『琉球拳法唐手』（1922年）によると、「精神修養」や「謙讓克己の精神」が空手道の修行の信条であると強調される¹⁾など、空手道において何より大切な事は、勝敗に関することよりも精神的な強さを養うこと、人格形成を目指すこととされている。こうした価値観は、当時の西洋型格闘技にはほとんど見出すことの出来ないもの⁶⁾だったといえる。また、稽古では、寒稽古や極限的な反復練習といった精神的鍛錬を主体とした内容が多く、自己完成、人格陶冶が目指されていた⁶⁾。

現在、空手道は日本体育協会加盟、国民体育大会参加、海外への普及は1950年代に入り急速に進められ、現在では世界選手権大会も開催されている。また、ボクシングやキックボクシング、レスリングなど他のスポーツと同様の体重制が導入されるなど、急速に競技化が進められた。一方、このような普及と競技化に伴い、審判の判定に対する不満を態度に表わす選手、試合終了時に礼もせずコートから下がる選手なども見受けられるようになり、礼節を重んじる倫理観が継承されていない可能性も考えられる。また、稽古内容においても、実践者は試合での勝利を目指し、身体資質の向上を主体としたトレーニング方法を多く取り入れるなど、競技試合のための方法論¹²⁾が広く普及している。

このような状況において、空手道実践者の空手継続年数を柔道や剣道実践者の場合と比較すると、空手道の場合は高等学校や大学を卒業すると空手道を辞めてしまうケースが多い。このことには、空手道は柔道や剣道と違い、社会人になると競技実践や稽古の場が少なくなることの影響があると推察される。しかし、「達成スポーツ化された条件下では、空手道実践者のほとんどが達成志向的な子どもや青少年だけになる。つまり、空手道を生涯的に行うことなくなくなってしまう⁶⁾」とされるように、競技化が進んだことによる空手道の達成スポーツ化が生涯スポーツとしての空手道発展を阻害している可能性も考えられる。特に、高校・大学空手道における競技化は顕著である。高校・大学

*新潟県十日町市立下条中学校 **芸術・体育教育学系

生の空手道実践者の中には、様々な運動種目を経験した後、高等や大学から空手道を始めた者や幼少期から空手道を修練している者がいるであろう。このような実践者においては、それまでのスポーツ経験に伴うスポーツ価値志向性が空手道の継続意志や取り組み方に大きく影響しているかもしれない。しかし、現在の空手道実践者のスポーツ価値志向性について検討した報告はなされておらず、空手道実践者のスポーツ価値志向性については不明な点が多い。

そこで本研究では、空手道実践者のスポーツ価値志向についての基礎的知見を得るため、高等学校・大学の空手道部員を対象とし、スポーツ価値志向性に関する質問紙調査を実施し、空手道実践者と他種目の実践者とのスポーツ価値志向の違いについて比較・検討した。

2 研究方法

2.1 調査対象

全日本学生空手道連盟1部所属の大学空手道部員81名、新潟県内の高校空手道部員48名（高校から空手道を学習）および集団競技系（：球技）の運動部活動に所属する大学生90名を調査対象とした。得られたデータは、種目別に比較した。また、空手道の場合は年齢（高校生・大学生）や競技形態（「組手」実践者・「形」実践者）等の面からも比較・検討した。

2.2 質問紙

質問紙には、永木⁷⁾による「日本的スポーツ価値志向モデル」に基づいて作成された「日本的スポーツの価値志向尺度」に関する質問紙（表1）を用いた。その質問内容は、「楽しみ志向」、「勝利志向」および「自己鍛錬志向」に関する3点から成っている。「楽しみ志向」は、「楽しみ」がスポーツ参加者の内発的動機付けとして不可欠で基本的な価値志向であることから設定されている。また、「勝利志向」は、「勝利」がスポーツにおける競技的特性を有する限り普遍的で不可欠な価値であることから設定されている。「自己鍛錬志向」は、「自己鍛錬」がスポーツ活動における人格陶冶的な教育的価値と密接に関係していることから、日本的スポーツにおける価値として不可欠であるとして設定されている。この質問紙に対する回答は、各回答者がスポーツ活動を行う際に最も重要と考えているものから順に3段階の番号で回答するよう依頼した。

2.3 統計処理

統計処理には、統計処理ソフトJavaScript-STARを用いて χ^2 検定を行った。5%未満を有意とし、10%未満の場合は有意傾向とした。

表1. 「日本的スポーツの価値志向尺度」に関する質問紙

【質問】
あなたがスポーツ活動を行う際、最も重要と思うのはどれですか。
以下の三つのうち、重要と思われるものから順に、
1～3と番号を付けてください。
【回答】
[] 楽しみのために行う。
[] 自己を鍛えるために行う。
[] 相手や他チームに勝つために行う。

3 結果

3.1 空手道実践者と他種目実践者におけるスポーツ価値志向の比較

図1は、「楽しみ」、「自己鍛錬」、「勝利」の各尺度について、各々を第一位にランク付けした対象者の割合（%）を各群で示したものである。また、対照として、図1には、永木⁷⁾による柔道の場合および剣道の場合の成績も資料として援用して示した。

各群におけるスポーツ価値志向について χ^2 検定を行った結果、人数の偏りは有意であった（ $\chi^2(6)=87.58, p<0.01$ ）。

「楽しみ志向」では球技群の残差だけがプラスに有意であり（ $p<0.01$ ）、柔道群（ $p<0.05$ ）及び剣道群（ $p<0.01$ ）の残差はマイナスに有意であった。また、空手道群の場合はマイナスに有意傾向（ $p<0.10$ ）であっ

た。図1に示すように、「楽しみ志向」の支持率を見ても空手道群は22.5%，柔道群は19.6%，剣道群は20.6%という支持率であるのに対し，集団競技実践者である球技群は62.2%であった。すなわち，球技群が最も「楽しみ志向」を重視しているという結果であった。

「自己鍛錬志向」では剣道群の残差がプラスに有意であり ($p<0.01$)，球技群の残差はマイナスに有意であった ($p<0.01$)。図1に示すように，「自己鍛錬志向」の支持率を見ても空手道群は53.5%，柔道群は57.7%，球技群は28.9%という支持率であるのに対し，剣道群は74.2%であった。すなわち，剣道群が最も「自己鍛錬志向」を重視し，球技群では「自己鍛錬」への志向性は低かったといえる。

「勝利志向」では空手道群 ($p<0.01$) 及び柔道群 ($p<0.05$) の残差がプラスに有意であり，剣道群 ($p<0.01$) の残差はマイナスに有意であった ($p<0.01$)。また，球技群の残差はマイナスに有意傾向 ($p<0.10$) であった。図1に示すように，「勝利志向」の支持率を見ても，剣道群は5.2%，球技群は8.9%という支持率であるのに対し，柔道群は22.7%，空手道群は24%であった。すなわち，最も「勝利志向」を重視しているのは空手道群であり，次いで柔道群であったといえる。

以上のことより，空手道群のスポーツ価値志向を他種目の場合と比較すると，「楽しみ志向」では球技群よりも低く，「自己鍛錬志向」では最も高い剣道群 (74.2%) と最も低い球技群 (28.9%) のほぼ中間に位置づけることが出来る。また，「勝利志向」では，4群の中では24%であり，空手道群が最も高いという結果であった。

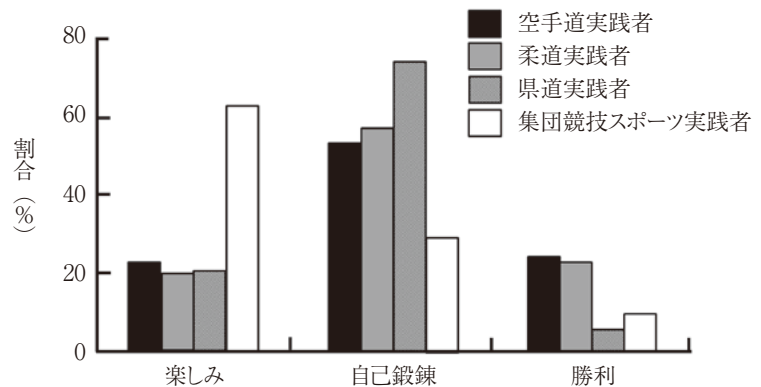


図1. 空手実践者と他種目実践者におけるスポーツ価値志向の比較。

3.2 空手道実践者におけるスポーツ価値志向

空手道実践者におけるスポーツ価値志向について詳細に検討するため，本研究において対象とした空手道実践者を学校種別 (高校生・大学生) および競技形態別 (「組手」実践者・「形」実践者) に分類して，そのスポーツ価値志向を検討した。図2は，「楽しみ」，「自己鍛錬」，「勝利」の各尺度について，各々を第一位にランク付けした対象者の割合 (%) を群ごとに示したものである。

各群におけるスポーツ価値志向について χ^2 検定を行った結果，人数の偏りは有意であった ($\chi^2(6)=13.401$, $p<0.05$)。「楽しみ志向」では，高校生「組手」群の残差がプラスに有意傾向 ($p<0.10$) であった。図2に示すように，「楽しみ志向」の支持率を見ても，高校生「形」群は10%，大学生「組手」群は19.4%，大学生「形」群は28.6%という支持率であるのに対し，高校生「組手」群は35.7%であった。すなわち，高校生「組手」群が，最も「楽しみ志向」を重視している傾向が伺われた。

「自己鍛錬志向」では，高校生「形」群の残差がプラスに有意であった ($p<0.01$)。図2に示すように，「自己鍛錬志向」の支持率を見ても，高校生「組手」群は53.6%，大学生「組手」群は47.8%，大学生「形」群は42.9%という支持率であるのに対し，高校生「形」群は80%であった。すなわち，高校生「形」群が最も「自己鍛錬志」を重視しているといえる。「勝利志向」では大学生「組手」群の残差がプラスに有意であり ($p<0.01$)，高校生「組手」群の残差はマイナスに有意傾向 ($p<0.10$) であった。図2に示すように，「勝利志向」の支持率を見ても，高校生「組手」群は10.7%，高校生「形」群は10%，大学生「形」群は28.6%という支持率であるのに対し，大学生「組手」群は32.8%であった。すなわち，大学生「組手」群が，最も「勝利志向」を重視しているといえる。

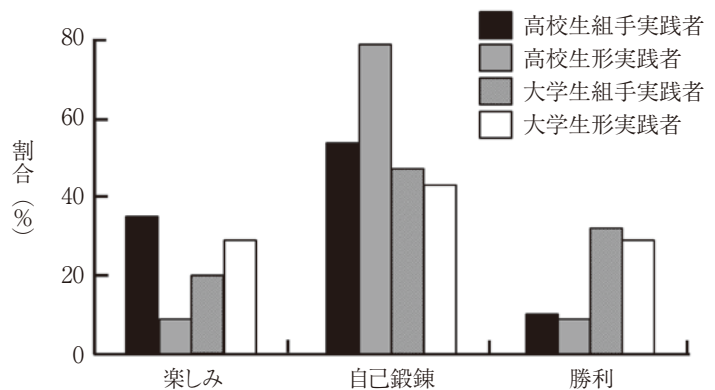


図2. 高校生組手実践者，高校生形実践者，大学生組手実践者，大学生形実践者の4群におけるスポーツ価値志向の比較。

以上のことから、「楽しみ志向」は高校生「組手」群が、「自己鍛錬志向」は高校生「形」群が、「勝利志向」では大学生「組手」群の支持が多いという結果であった。

4 考察

4.1 空手道実践者と他種目実践者におけるスポーツ価値志向の比較

本研究では、空手道実践者のスポーツ価値志向について基礎的知見を得るため、空手道実践者と他種目の実践者のスポーツ価値志向の比較を行った(図1)。

その結果、空手道群のスポーツ価値志向を見ると、「楽しみ」、「自己鍛錬」、「勝利」の3つの尺度において最も重視されているものは「自己鍛錬志向」で、53.3%であった。空手道群における「自己鍛錬志向」は剣道群における「自己鍛錬志向」(74.2%)ほど顕著ではないが、同じ大学生である球技群の自己鍛錬志向が28.9%であることを考慮すれば、空手道群の「自己鍛錬志向」は比較的強いものであるということが出来る。多くの現代武道は武術から武芸へ、武芸から武道へと発展してきた。武芸は、武士たちがよりすぐれた立派な武士になるために身につける技芸と位置づけられた。そのため、武芸から発展した今日のさまざまな武道の根本には、必ず、すぐれた人格をめざすという目標が存在した⁹⁻¹¹⁾。空手道においても、船越義珍は日本最初の空手道場「松濤館」の道場訓二十カ条³⁾のなかに、「空手は礼に始まり礼に終わることを忘るな」、「空手に先手なし」、「技術より心術」、「先ず自己を知り而して他を知れ」、「勝つ考は持つな。負けぬ考は必要」など、勝敗に関することよりも精神的な強さを養うこと、人格形成を目指すことを目的とした理念を取り入れた空手道の普及に努めた。このような歴史的背景から、空手道群の「自己鍛錬志向」の強さは、武道における伝統的な修行観の継承を示すものと解することが出来る。

空手道群において「自己鍛錬志向」に次いで高かった尺度は「勝利志向」で24%であった。そして空手道群の「勝利志向」は4群の中で有意に高かった($p<0.01$)。また、柔道群における「勝利志向」も22.7%と4群の中で高いことが認められた($p<0.05$)。一方、剣道群における「勝利志向」は5.2%と4群の中で有意に低い($p<0.01$)という結果であった。特に、注目すべきことは、空手道群24%、柔道群22.7%に対して剣道群は5.2%と3群とも同じ武道として「人格形成」を目指すことを第一としているにも関わらず、差が認められた点であろう。本多²⁾が、「剣道の世界、特に指導の場において戦術指導の有無を尋ねると、“フェイントばかりに頼った剣道はしてほしくない”“そんな姑息な手段を使ってまで勝ってほしくない”“勝つためなら何でもありという考え方は持ってほしくない”“正々堂々と戦ってほしい”というような答えがよく返ってくる」としているように、剣道群は勝ち負けのみにこだわるのではなく、試合場面においても「人間形成」という観点を意識していると考えられる。また、中林⁸⁾は、剣道を中心とした武道の精神文化的特性を論じるなかで、「武道というものは(中略)強弱によって勝負を争うものではない」とする沢庵の『太阿記』など近世武芸伝書を例に取り、武道には「勝敗の超越」という伝統的価値観があると指摘している。このようなことから推察すれば、剣道群の「勝利志向」の低さは、伝統的な勝敗に関する価値観が色濃く継承されていたことに因るものと理解出来る。このとき、前述したように空手道においても「人格形成」が第一に掲げられ、実践者の大半(53.5%)は「自己鍛錬志向」であった。しかし、組手試合を見ていると“フェイントを強く促す指導者”や“あたかも強打されたかのようにわざと倒れ込み、相手に反則を加算させる実践者”“強打による反則(相手にポイントが加算される)を行い相手にダメージを与える実践者”など空手道競技のルールを利用して試合を優位に進めようとする場面が散見されるなど、剣道に比べて勝利至上主義が強い実態も存在する。永木⁷⁾が、「アメリカン・スポーツを代表するアメフトには、ゲームにおける営利、すなわち“勝利の追求”という価値観がその中核として在り、ルールの精緻化も、“勝敗”の客観化を最大課題として行われてきたと見ることが出来る」と指摘しているように、空手道実践者において勝利至上主義の傾向が強くなった原因の一つとして、国際大会や世界大会の増加に伴う空手道試合規則の競技化・客観化や本家日本の勝利という使命感が影響している可能性が考えられる。空手道や柔道では、国際大会、世界大会、オリンピック(柔道)を頂点とした「勝利の追求」が目指されていることが、空手道群や柔道群の「勝利志向」に影響したものと推察する。

空手道群における「楽しみ志向」は4群のなかで2番目に高い22.5%であった。「楽しみ志向」については、柔道群(19.6%)、剣道群(20.6%)と武道群においては2割程度で、4群のなかでは球技群が62.2%と有意に高かった($p<0.01$)。金崎ら⁴⁾がスポーツの特徴を挙げるなかで「スポーツは遊戯的要素をもつということである。(中略)そして、遊戯の本質をなすのは人びとを夢中にさせるところの楽しさ、面白さなのである。事実、スポーツは、最初は遊戯とほとんど同義の言葉であった。スポーツがときに自己目的的活動といわれるのは、この遊戯的な楽しさの要素があるからにはかならない。」というように、球技群における「楽しみ志向」の支持率の高さについては、スポー

ツが持つ遊戯性の強さが関係していると考えられる。また、楽しさを生み出す原因に関して、バスケットボールのようなチーム・スポーツでは「友情・交友」が重要な要因であるが、個人で活動するダンサーなどの場合にはその関わりは低い¹³⁾とされている。このことから、球技群は仲間とスポーツを行うことにも「楽しみ」を見出すため、「楽しみ志向」が多く支持されていたと考えられる。これに対し武道種目は、生死を懸けた戦いの術から発展した競技文化であり、その根源は遊戯ではなかったという背景がある。そのため、武道における一対一の競技形式の中に遊戯的な「楽しみ」を見出しにくいのかかもしれない。また、このような観点から、空手道、柔道、剣道群の「楽しみ志向」が球技群と比較して少なかったことについては、武道種目の群が武道を遊戯と捉えずに取り組んでいることの表われとも考えられる。一方、武道種目の群においても「楽しみ志向」は支持率が2割程度とはいえあったことから、永木⁷⁾が指摘したように、武道実践者には日本の伝統文化における普遍的な価値観の継承を楽しむ態度もあると推察される。

4.2 空手道実践者におけるスポーツ価値志向

本研究では、学校種別（高等学校・大学）および空手道において「組手」か「形」を中心として実践をおこなっている場合のスポーツ価値志向の違いについても比較を行った（図2）。

その結果、「楽しみ志向」にばらつきがみられたが、高校生の「組手」群に「楽しみ」への志向性が強かった。そのような中で、「自己鍛錬志向」では、高校生「形」群が最も自己鍛錬を重視していた（ $p<0.01$ ）。この原因として、大学生に比べて空手道の経験年数が短い高校生「組手」群の中には、「組手」を行うことに競技的な楽しみを見出している者が存在していたものと推察する。また、空手道の「形」修行は肉体と精神を鍛えるために時間をかけて完成させて行くこと目的が置かれているが、高校生「形」群の中には、出来ない形を完成させることに価値を見出している者が存在していたものと推察する。一方、高校生の場合と同じ形の実践であっても大学生「形」群の場合、すでに幾つかの演武形を習得している実践者が多い。また、大学生の「形」群や「組手」群における「勝利志向」の多さから推察して、その習得した演武形を用いる形大会での勝利を意識していることが、「自己鍛錬志向」における高校生「形」群と大学生「形」群の差に顕著に表れた原因と考える。

「勝利志向」において、高校生「組手」群10.7%、高校生「形」群10%、大学生「組手」群32.8%、大学生「形」群28.6%と高校生と大学生の間に大きな差が生じていた。このような原因には、空手道の経験年数が影響していると推察する。本研究における高校生の場合は「強くなりたい」という気持ちを動機に高校から空手道を始めた者が多かった。それに対して、全日本学生空手道連盟1部所属であった大学生の場合は、幼少期から空手道を始め、所属大学の優勝のための特別待遇学生や推薦入学制度で入学して空手を継続している者が多いことが「勝利志向」も違いに影響しているのであろう。さらに、高校指導者と大学指導者における指導・教育理念の違いが高校生や大学生群のスポーツ価値志向に影響を与えている場合も考えられる。高校空手道部の指導者のほとんどは教員であるため、日本の伝統的な行動の仕方や物の考え方に対する教育的意義を期待して指導にあたる場合が多い。それに対して、大学では、大会での勝利のために教員以外の者を学外からの指導者として採用しているケースが多いため、「勝利の追求」という指導者の価値観が大学生群の「勝利志向」にも影響しているのかもしれない。

5 おわりに

本研究では、空手道の伝統的な文化性の継承と学校体育の実技教育における空手道の発展の一助とするため、空手道を継続的に実践している高校・大学生のスポーツ価値志向を柔道実践者、剣道実践者及び球技実践者と比較、検討した。その結果、(1) 空手道群のスポーツ価値志向では「自己鍛錬志向」が強かったことから、現在の空手道実践者には空手道における伝統的な精神性が継承されていると解することが出来た。しかし、(2) 他種目の場合よりも「勝利志向」を強く意識していた。特に大学生実践者において顕著であった。今後、競技としての空手道実践が主流となった場合は、さらに「勝利」が強く強調される可能性も考えられる。中学校「体育」における武道必修化の中で、即効的な攻撃力が身につく空手道が武道教材として取り扱われた際、このような状況では、いじめや暴力の道具に成り得る危険性も危惧されよう。一方、空手道の授業への採用により、礼、協調性、忍耐力、他者理解力など教育的効果が期待出来ることから、今後、空手道を教材として取り扱うためには、指導者が技術や勝利のための方法論のみでなく、空手道の「人格形成を目指す運動文化」としての特性的価値を理解し、その精神性を具現する空手技法を学習者に理解させることが、学校体育の実技教育における空手道の発展のために必要と考える。

引用文献

- (1) ビットマン・ハイコ：空手道における歴史と「教え」について，武道学研究，第30巻，pp. 1-4，1997.
- (2) 本多壮太郎：剣道における戦術指導・学習アプローチ，身体運動文化学会会報，第22号，p. 6，2007.
- (3) 香川政夫：空手道実践トレーニング，永岡書店，p. 5，2006.
- (4) 金崎良三，他：現代スポーツの社会心理，遊戯社，pp. 25-26，1985.
- (5) 加藤勝久：日本の武道，空手道，pp. 220-221，1983.
- (6) ミヒャエル・エーレンライヒ：武道としての空手の文化的独自性－空手の本質とマーケティング戦略－，身体運動文化研究，第9巻1号，pp. 44-50，2002.
- (7) 永木耕介，他：柔道実践者のスポーツ価値志向に関する実証的研究－特に伝統性と近代性から－，武道学研究，第30巻2号，pp. 1-8，1997.
- (8) 中林信二：武道のすすめ，島津書房，pp. 207-209，1994.
- (9) 菅野純：武道 子どものころを育む，日本武道館，pp. 107-111，2001.
- (10) 菅野純：日本の武道，第一章 日本の武道，第六節 武道の教育力，日本武道館，pp. 59-60，2007.
- (11) 菅野覚明：日本の武道，第一章 日本の武道，第二節 武士道から武道へ，日本武道館，pp. 42-43，2007.
- (12) 高岡英夫：現代体育スポーツ大系，空手道の概要，第20巻，p. 111，1989.
- (13) チクセントミハイ：楽しむということ，今村浩明訳，思索社，p. 39，1991.

The Study of Value Orientations toward Sport in Karatedo Practicer

Hiroataka FUJIWARA* · Shigeki IKEGAWA** · Kan JIKIHARA**

ABSTRACT

In order to assist preserving the traditional characteristics of Karatedo and blossoming of Karatedo as a practical education in school, we examined the value orientation toward sport to high school and university students who were continually practice Karatedo by using questionnaire data. As the result, we found out current Karatedo practitioner's tendency of preserving the traditional characteristics of Karatedo, based on their value orientation which was tend to be "self-discipline". On the other hand, they were much more aware of "pursuing them win" than other sport practitioners, especially among university students. In the future, it will be possible that they were becoming to be more aware of "pursuing them win", if competitive Karatedo would consist mainly of Karatedo practice. If Karatedo in today's context will be introduced into martial arts educational tool in physical education of junior high school, Karatedo might be used as the tool for bullying or violence. However, adopting Karatedo to the school curriculum was expected to yield educational benefits, such as developing courtesy, cooperativeness, perseverance, and ability of comprehending others. In order to blossom of Karatedo as a practical education in school, it is necessary to impress Karatedo's characteristic value, which is "traditional culture for character formation", and the skills to embody the value, instead of merely teaching techniques and methodology to win.

* Gejo Junior High School, Niigata ** Music, Fine Arts and Physical Education